

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月1日

わたしは、悩みと愁いに満ちた心で、涙ながらに手紙を書きました。・・・わたしがあなたに対してあふれるほど抱いている愛を知ってもらうためでした。-2コリント2:4

癒しといのちをもたらす務めは本質的には経験から生み出される必要があります。この事実はまさに使徒パウロにおいて見ることができます。たとえば、第一コリント書の彼の務めは、第二コリント書において見ることができる人間性に基づくものでした。

第一コリント書において、パウロは神の選びが「弱い者」にあると書いていますが、第二コリント書においては、まさに神聖にして与えられた彼の厳しい弱さを見ることができます。最初の書簡では信者たちのひとつを訴えています。第二書簡では、コリントの人々から排除されながらも、自分が彼らに属するひとりであることを見せています。コリントへの第一書簡13章では古典的な愛の取り扱いのメッセージを提示し、第二コリント書12章15節では「わたしはあなたがたの魂のために大いに喜んで自分の持ち物を使い、自分自身を使い果たしましょう」と述べています。そして最後に第一コリント15章では新約聖書の中で復活に関してもっとも明確な教えを展開し、第二コリント書では自分自身が一瞬一瞬「死者をよみがえらせる」神に頼る必要があることを証しています。彼のすべての教えは彼の経験によって裏打ちされているのです。キリストのための務めにおいてはそれ以外の基礎はあり得ないのです。

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月2日

どのようにして、若者は歩む道を清めるべきでしょうか。あなたの御言葉どおりに道を保つことです。-詩篇119:9

パリサイ人は器の外側をきれいにしますが、内側は不純に満ちたままです。私たちの主は、外見的事柄を取り繕い内的な要素を無視するゆえに、彼らを叱責されました。そこで私たちの多くはこの事例から、霊的真理の内面性を大事にすれば、すべては良しと結論づけます。しかし神は外面と内面の純粋性を求められます。内面性の欠如した外面性は霊的な死であり、外面性を無視した内面性は単なる超霊的生活に過ぎません。これらの事柄を超霊的に避けてしまうことは決して霊的ではないのです。「これこそ行うべきことである。もとより、十分の一の献げ物もないがしろにしてはならないが」（マタイ23:23）。神聖な命令がいかにも瑣末なことに見えようとも、それらは神の御心の表現なのです。どうしてそれらを軽く扱うことができましょう。私たちの不純さによってもっとも小さな神の御心をすら無視してはならないのです。

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月3日

わたしから離れては、あなたがたは何もできないーマタイ15:5

自分で何かをするように唆されることは人間性の内に宿された性質です。私の国における塩田で私自身が目撃したことを例として説明させて下さい。中国では苦力たちは120キロの塩を担ぐことができます。またある者たちは250キロも可能です。今、120キロのみを担ぐことができる男が250キロの塩の前に来るとして下さい。彼は確かに自分にはそれを担ぐことはできないことを知っています。しかし、自分でできないとしても、なお彼は担ごうと試みるのです。若い私は、10人から20人の男たちが来てその努力する姿を見て面白がっていました。彼らは自分にはできないと知っているのです。ついに自分ではできないと観念すると、できる人に代わるのでした。しばしば私たちも主を思い起こし、主ご自身はそれをする用意と力があることを認めて、主に明け渡すに至るのは、もう自分にはまったく不可能であると絶望する時なのです！私たちがうまくなし得て、それを自分自身で握り締めている間は、御霊の全能の御力による働きに対して僅かな余地しか残していないのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月4日

キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになりました。-1コリント1:30

神は私たちにキリストを賜りました。私たちは今や、キリストの外に何か必要とするものはないのです。聖霊は私たちの内にいますキリストご自身を生み出すために遣わされました。それはキリストから離れて、あるいはキリストの外において生み出されるものでは決してありません。彼が「私たちにとって・・・となられた」のです。これは聖書の中のもっとも重大な宣言です。私たちがこれを信じるのであれば、私たちに必要なものはすべて備えられるのであり、神がそれを良しとされていることを知るのであります。なぜなら、私たちの内にいます聖霊により、主イエスご自身が私たちに欠けている事柄そのものになれるからです。私たちは聖を何か高い徳として見上げ、謙遜を神の恵みとし、愛を神からいただくべき賜物とみなしていたことでしょう。しかし、神のキリストご自身があらゆる私たちの必要の満たしとなって下さるのであります。ためらうことなく、キリストをそのような方として経験しましょう。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

12月5日

そこで、彼らは網をおろした。すると、おびただしい魚のために、網を引き上げることができなかった。そこで、イエスの愛されたあの弟子がペテロに言った。「主です。」—ヨハネ21:6f

イエスが岸边に立っていた時、不思議なことに彼らの誰もイエスに気がつかなかったのです。イエスと最も親しく接していたペテロやヨハネすら気が付くことなく、いわんや後になって傷を見てから主を認識したトマスなどはもちろんでした。復活された主は人間の目によっても、肉の手によっても認識されることはないのです。主がもつとも馴染みのある言葉を語った時ですら、彼らは気づかなかったのです。しかし網がいっぱいになったとき、ヨハネは突如理解したのです。

後に、岸部でイエスが「来て、朝の食事を取りなさい」と語ったとき、彼らは主を認識しており、「あなたはどなたですか？」と誰もたずねなかったことがわかります。ここにパラドックスがあります。通常であれば、何かを質問することはその知識が欠如していることを意味します。あえて質問をしないことは自分が無知であることがわかってしまうのを恐れるからです。しかし、ここには恐れと知識の両方が見られます。外なる人としては、彼らは恐れていました。しかし内なる人としては、彼らは分かっていたのです。しばしばそれを説明することはできません。しかし、確かに内なる、神聖に与えられた確証を得るのです。これこそがクリスチャンの信仰です。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

12月6日

私は私を強めてくださる方によってどんなことでもできる-ペリピ4:13

今日、神のための働きにおいて、しばしばいろいろな事柄があまりにも組織化されており、私たちが神に頼る必要がないのです。しかしそのような働きに対して主の明確な宣告があります：「わたしから離れてあなたがたは何もできない」と。なぜなら神聖な働きは神聖な力によってのみなし得るのであり、その力は主イエスのうちにのみ見出されるべきものだからです。かの預言者とともに、私たちが「もはや語ることでできない」と言う点に至る時にこそ、神が語って下さることを見出すのです。神は私たちが自分で成しえる事を命じることはありません。私たちには不可能な生き方や私たちが成し得ない業をなすことを神は求められます。しかし私たちが神の恵みによってそれを生き、それを成し得るのです。私たちが生きるいのちは神の力の中に生きているキリストのいのちであり、私たちがなす業は、私たちが従うキリストの御霊によって、キリストが私たちを通してなされるのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月7日

イエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の小羊。」と言った。-ヨハネ1:36

ヨハネが最初にキリストを神の小羊として紹介したとき、「世の罪をとりのぞく」と宣言しました(29節)。すなわちキリストの贖いのみわざを強調したのです。しかしながら、二回目には、ヨハネは単純にこう言っただけでした、「見よ、神の小羊！」と。ここではキリストのみわざよりも、そのご人格に強調が置かれているのです。人々の価値を見出すのは彼らがどのような存在であるかにかかっているのです。私たちが人々を愛する際、彼らがいかなることを成し遂げたかによるのではなく、どのような存在であるかによるのです。私たちがキリストの価値を見出す場合も同じ理由です。私たちは主がくださった賜物のゆえに感謝しますが、キリストがいかなるお方であるかのゆえに、私たちはキリストを賛美します。十字架のキリストは私たちの驚くべき感謝の念を生み出しますが、御座のキリストは私たちの賛美を湧き上がらせます。私たちはキリストがなされたことを見て、そのゆえにまったき感謝を覚えますが、さらにはキリストがいかなるお方であるかを知り、そしてキリストを称えるのです。

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月8日

だれでも、わたしにつまづかない者は幸いです。-ルカ7:23

バプテスマのヨハネはこの言葉が好きではありません。彼はエリアが証したような新しいリバイバルを求めておりましたが、今ここでは牢獄の中で差し迫った死の宣告を待っているのです。もし彼自身が何も達成し得なかったとしたら、イエスご自身が第二のエリアとしてその務めを全うすることになるのです。

私たちが神がなすべきと自分で感じたことを神がなさることがなかったとしたら、神に対して憤ることでしょう。私たちは神の御旨を知ろうと努め、神ご自身の栄光を求めますが、神のなさることにおいて、多くの場合、失望を経験させられるのです。私たちはある種の窮地に立たされ、そこから脱出する術がまったくないことがあります。あるいは病気にかかり、神に癒しを求めますが、癒されないこともあります。あるいは経済的に困窮しても、カネが与えられないことがあります。あるいはもっと悪いことに、神ご自身の栄誉が窮地に立たされるような場面に直面することもあります。神はご自身の御名のために来られるべきなのですが、しかし神はそうなされません。状況は変化することなく、獄も開くことなく、人々の心が解かされることなく、誰も「主よ、私はどうすべきでしょうか？」と尋ねる者もありません。

ある日、あらゆる事柄が明らかになる日が訪れます。裁きの座の前に立つとき、私たちが裁かれるばかりでなく、神は私たちに事情を説明されるでしょう。多くの事において、私たちが正しくなかったことが証明されるでしょう。しかし、また多くの事柄において、神は言われることでしょう、「わたしは正しかったが、あなたもまた正しかった」と。

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月9日

あなたがたもまた互いに足を洗い合いなさい-ヨハネ13:14

ここで言われている「洗足」は状態が新鮮にされるためのものであり、罪との関係ではありません。罪とは違い、埃や塵が私たちの足を汚すのは避けがたいことです。埃の中で転げまわるとは、確かに罪でもあるでしょう。しかし私たちは地と接する限り、足は必ず汚れるものなのです。一日の終わりに、何時間もオフィスで仕事に没頭した兄弟が疲れて、呆然としつつ家に帰り着きました。彼は朝の静かな時間に味わった主との新鮮な交わりに戻ることに困難であると感じるのです。何か膜が表面を覆ってしまっているような感じで、主と共にすぐさま立ち上がることが難しいように感じるのです。

しかし友人が彼と出会い、すぐさま主に対する賛美を捧げます。するとただちに彼は引き上げられる力を覚えるのです。それはあたかも誰かが埃をはらい、覆いをも取り除いてくれたような感じです。彼の足は改めてキレイにされたのです。「足を洗い合う」ことはこのように物事を最初の新鮮な状態に戻すことです。私たちはそのことをほとんどの場合、意識しないで行なっているかもしれません。しかし、私たちは絶えず互いにキリストにある兄弟姉妹に対して、このように新たに奉仕をしているのです。ここで私は強調したいと思います。このような奉仕は実に偉大なる務めなのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月10日

すると彼は三回打ったが、それでやめた。神の人は彼に向かい怒って言った。「あなたは、五回、六回、打つべきだった。…」-第二列王記13: 18f

私たちは常に神がなさり得ることに制限を設けてしまう危険があります。今日、神は福音の働きにおける新しいわざが解き放たれることに私たちが備えることを願われます。しかし私たちは、自分が進むべき備えのない信仰の領域に入ることを避けて、神を制限するのです。私たちは主の「勝利の矢」の飛翔を理解していません。私たちが数百人の救いで満足するのであれば、さらなる数千人の救いの妨げとなるのです。福音を宣べ伝えるために巨大なホールを建てるのが、将来の成長に制限を設けることになる可能性はないでしょうか。神の恵みに対して境界線を設けてしまう大きな危険性が常にあります。神が賜う恵はさらなる大きな恵への道を備えるものであり、その障害となってはならないのです。すべてを用いて働きに備えましょう。しかし絶えず過去の束縛を自分でふるい落とし、常に新鮮な期待の中に生きましょう。私たちの前には過去のわざよりもはるかに大いなるわざが待ち受けているのです。私たちに對する神のご計画は予想をはるかに超えるものがあるのです。

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月11日

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。-エペソ2:8

私たちは恵みにより救われたと正しく語ります。しかしそれは何を意味しているのでしょうか？すなわち、私たちは主イエスのうちに安息することにより救われたのです。私たちは自分の救いのために何もしていません。私たちはただ罪に病んだ私たちの魂を主のもとに置いただけです。私たちはクリスチャンとしての歩みを私たちの行いに頼って開始したのではなく、主がすでに成し遂げられた事実¹に安息することにより始めたのです。このことに到る以前には誰もクリスチャンとは言えません。なぜなら、「私は自分の救いのために何もし得ませんが、神はキリストにあって私のためにすべてを成し遂げてくださいました」と言うことこそ信仰生活の最初のステップだからです。神が喜んで私たちに賜る恵みには限度がないのです。

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月12日

それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないーヘブル2:11

第四の福音書の冒頭において、その福音伝道者は、イエスを「御父の独り子」と書いています。同じ書の最後においては、復活の主がマグダラのマリヤに向かって、「わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい」と言われました（ヨハネ20:17）。この福音書のあるところまでは、イエスは「御父」あるいは「わたしの父」と語っていました。今や、復活後においては、「あなたがたの父」と言われます。なんと素晴らしいことでしょうか。「死からよみがえられた初穂」であるお方、私たちの長兄である方がこう言われるのです。受肉と復活において、主は神の家族に多くの息子たちを加えられたのです。そこで同じ節において、主は彼らのことを「わたしの兄弟」と呼ばれます。神を賛美します。その昇天においてあなたと私は子とされる霊を受けたのであり、それゆえに私たちは、「アバ、父よ」と呼ぶことができるのです。「私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいませ」。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月13日

それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。-1コリント12:22

かつて何年か前、私は自分自身では決して解決策を見い出せないと思える非常に大きな人生の問題に直面しました。その時、僻地のある場所で福音のメッセージを語っていましたが、その答えを見出すために不可欠と感じていた御言葉の知識を他の神の僕たちの誰も知り得ませんでした。私は必要とする交わりをどこに見つければ良いのでしょうか？私が宣べ伝えていたその田舎の人々の間にも、もちろん数名の信者はおりましたが、みなキリストにある赤子だったのです。彼らがどうしてこの問題を解決し得るのでしょうか？

しかしながら、私はその時点までにすでに完全に行き詰まっていたのです。彼らを招く他にまったく方法はありませんでした。そこで必要を抱えた私の求めに応じて、これらの純朴な兄弟たちが私の元に来ました。私は彼らに自分の問題を語り、彼らは祈りました。一なんと、彼らが祈ると光がもたらされたのです！詳細は説明する必要はありません。とにかくそれは解決されたのです。しかも再発することがないほどにきれいにです。このような「弱い肢体たち」により頼むことにより、神はご自身の大いなる喜びを見せて下さったのです！

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月14日

ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、
かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。-ヘブル10:25

キリストは教会の頭であり、また「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだ
であり、ひとりひとり互いに器官なのです」。すべてのクリスチャンの関係は、したがっ
て、互いに肢体同士の関係であり、肢体に対する頭の関係ではないのです。ある使徒
が荘厳な説教をし、すべての信者が肯きつつ、熱心かつ頻繁に「アーメン」と唱えるな
らば、その集会は霊的に深いものであると見えることでしょう！しかし彼らが集まる時こ
そ、彼らの真の霊的状态が露わにされる時なのです。「講壇対一般席」なる原則は、罪
人たちに対して喜びの訪れをダイナミックに告げるためには有益でしょうが、クリスチャ
ンたちの間においては受動性を養ってしまう傾向があるのです。成長するためには「丸
いテーブル」の原則が必要です。それにより互いに励まし合い、教会は生かされ、また
成熟するのです。私たちの交わりは、果たして「相互性」のスタンプを押されているもの
でありましょうか？

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月15日

「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。-2コリント4:6

救いとは何でしょうか？それは神聖な光が差し込むことです。その光が遮断されることは滅びを意味します。しかし神は滅びつつある私たちの心の中にその光を照らし込んで下さいました。見えるようになることは救いでした。救い主のみ顔の栄光を見るや、たちまち私たちは救われたのです。単に教義を理解し、それに同意するだけであれば、何も起こりません。それは真理であるお方を見ていないからです。カメラのシャッターが開くならば映像がフィルムに映されるように、真にその方を救い主として見た瞬間、私たちの内側における造り変えが開始され、私たちにとって「天的な幻」であることが、今度は「私のうちに御子が啓示」されることになったのです（使徒行伝26:19；ガラテヤ1:6）。そのような生きた経験はあえて記憶しようとする必要はありません。あなたはそれを忘れ去ることは決してできないことでしょう。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月16日

いや、ほかにもうひとり、私たちが主のみこころを求めることのできる者がいます。しかし、私は彼を憎んでいます。-列王記上22:8

思い込みは恐るべきものです。嘘を言うことは、自分が偽りを語っていると知りつつ他人を騙すことです。思い込むことは自分自身を欺むことです。嘘を語りますが、それに気がついていません。それは私たちの内なる光が闇になるほどに良心の及ぶ領域を超えてしまうことです。一言で言えば、真理を拒絶することです。この状態は闇を選ぶことにより達成されます。「悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない」、「それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます」（ヨハネ3:19;2テサロニケ2:11）。そしてついに彼らには思い込みが真理となり、自分が行っていることを信じるに至るのです！タルソのサウルも「賛成していた・・・」のです。

私たちはどのように解放されるのでしょうか？ただひとつのことによります：光です。「真理を行う者は光に来る」のです。神はもはやそれ以上のことをする必要はありません。私は時に質問を受けます、「なぜ常に啓示のことを語るのですか？なぜ神の解放の御わざを強調しないのでしょうか？」と。私は答えます：なぜなら啓示は御わざですから、と。それによりサウルは自分が神を冒瀆していることに気づいたのです。それによりヨブは心動かされて告白したのです、「私は今あなたを見ます。それゆえ私は自分を退けて悔い改めます」と。これは第二の御わざではありません。神は私たちを見えるようにして下さいました。そしてそれで十分なのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月17日

苦しめられ、もてあそばれて、慰められなかった女よ。見よ。わたしはあなたの石をアンチモニーでおおい、サファイヤであなたの基を定め-イザヤ54:11

エデンにおいてもパラダイスにおいても、金と共に宝石を見ることができます(創世記2:12;黙示録21:19)。宝石は一日にして形成されるものではありません。その形成には時間が重要な役割を果たします。それらは地球の火によって長い期間をかけて生み出され、その美しさは熟練した技工士のカットによって輝くのです。霊的に言えば、このことは、私とあなたの内側における神聖な忍耐によって生み出される霊的な資質を意味します。その価値を生み出すには代価が必要なのです。代価を避ける者たちにはその価値は得られません。恵は無代価です。しかし高い代価を払うことによるのみ尊い宝石を入手できるのです。私たちは何度も何度も「これはあまりにも代価が大きすぎる！」と叫びたくなるかもしれません。それでもなお、私たちは主と共に「火と水をくぐる」ことを学ぶのです。これはきわめて尊いことです。神の光の中において、ある事柄は自ずと崩壊してしまうでしょう。火を待つ必要はないのです。かくして真に価値のある事は神の時間のテストに耐え得るのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月18日

ナザレのイエスの名によって、歩きなさい-使徒行伝3:6

その門に座っていた足萎えの男に語ったペテロの言葉を思い巡らしてください、すなわち名によって。明らかに他の名前は、とりわけ彼自身の名は、これと同様の劇的な結果を生むことはなかったでしょう。簡単な喩えを話しましょう。少し前に、あるまとまったお金を要求するために兄弟が使わされてきました。私は彼の手紙を読み、彼が求めるものを用意し、その使者にまとまったお金を渡しました。これでよかったのでしょうか？もちろん、正しいです。その手紙には私の友人のサインがあり、私にとってはそれで十分だったのです。私はその使者の名前、年齢、職業、生誕地などを尋ね、それが受け入れ難かった時には、彼を空手で送り返すべきだったのでしょうか？もちろん、違います。彼は私の友人の名によって訪ねてきたのであり、私はその彼の名を貴んでいたからです。

神はその栄光のうちにある御子をご覧になります。地上に置かれている私たち自身ではなく、神は御子の名前を高く掲げられるのです。かの日に起きた出来事は、その状況に対するイエスの御名の衝撃の結果であり、弟子たちが他の者たちと異なっていたのは、その御名を用いる権威を与えられていたことによるのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月19日

苦い根が芽を出して悩ましたり、これによって多くの人が汚されたりすることのないように—ヘブル12:15

主のご愛顧は、あたかも部屋の中に閉じ込めようとする野生の鳥のようなものです。あなたが努力すれば、かえってそれを招き入れることはできません。それは鳥の意のままのことであり、しかも招き入れたとしてら、あなたは再び飛び去ってしまわないように意識することでしょう。あなたにはそれを部屋に入るよう説得することはできません。しかし離れ去らせることは容易です。あなたの側の小さな不注意でそれは飛び去るのです！

私たちを祝福することにおいては、神がイニシアティブを取られます。私たちの側のいかなる努力も求められません。しかし神の祝福が十分に注がれた時には、わずかな不注意でそれを失うことがあるのです。神聖なご愛顧は兄弟たちが調和しているところに見出されます。私たちが十分に知っているとおりに、分裂があるところにはそれは決して存在しないのです。兄弟と何かの事柄において対立があることがいかに重大なことを理解しているのでしょうか。仮に、もし十分に吟味した結果、あなたがまったく正当であるとしても、です。主の顧みを失わないように、最善を尽くしてあなたの言葉に注意してください。そうでないと鳥は飛び去ってしまうことでしょう！

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月20日

あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。-ルカ17:10

この章では、しもべは二種類の働きに携わっています。すなわち、「耕すこと」と「羊を飼うこと」であり、共にきわめて重要な仕事です。しかるに、その仕事から帰ったとき、しもべは自分の食事に与る前に、その主人の満足を満たすべきことをイエスは思い起こさせています。私たちが世における労苦から戻る時、それが未信者に福音を伝えることであれ、群れを養うことであれ、自分がなした事柄を自己満足的に思い巡らす傾向があるのです！しかし主はこう言われます。「自制しつつ、私に仕えよ！」と。もちろん、私たち自身も食べたり、飲んだりします。しかし、主の乾きが潤され、餓えが満たされるまでは保留すべきなのです。私たちが楽しみを得ます。しかし、主の喜びが満ちるまではそれを待つのです。私たちは常に自問自答すべきでしょう：私たちの働きは、第一義的に自分自身の満足のためであるのか、それとも主の満足のためであるのか、と。

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月21日

また彼らが、おのおのその町の者に、また、おのおのその兄弟に教えて、『主を知れ。』と言うことは決してない。小さい者から大きい者に至るまで、彼らはみな、わたしを知るようになるからである。-ヘブル8:11

旧約の下にあっては、一般的に言って、神の御心を追求することは律法と預言者によって制約されていたと言えます。しかし、キリスト信仰においては重要なのは、情報ではなく、啓示です。あなたはキリストに関する教科書的知識を得ていますか？つまり、単にキリストの真のしもべが語ったことによってキリストを知っているのでしょうか？それともあなた自身がキリストに直接接触して、主を知るに至ったのでしょうか？私たちのクリスチャン生活において、神と親密に生きた神が見せて下さったことを告げてくれる友人を持つことは非常に貴重な要素です。私たちは、何度も何度も、彼らの注意を引く促しと彼らの成熟した助言の静謐さを必要とします。しかし新訳は次のことを保証しています：「すべての者がわたしを知るようになる」と。ここの「知る」という単語は「自分自身で知る」という意味です。私たちは自分を聖なる神の人からもたらされる光に完全にまた排他的に委ねるのではありません。それは確かに健全なことではありません。しかるに私たちは、自ら真摯に主ご自身のみ声を聴くことに責任があり、また主ご自身に従う義務があるのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月22日

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。-エペソ4:13

聖句の解釈が私たちと異なる人々と親密な交わりを維持することは、私たちの肉にとってはきわめて困難なことです。霊にとっては意義のあることです。私たちは正しい見解を有しているかもしれませんが、神は私たちが正しい態度を取るための機会を備えてくださっているのです。私たちは正しいことを信じているかもしれませんが、神は私たちが正しく愛することを試されるのです。健全な霊的な教えで心を満たすことは容易ですが、心は真の愛を失いがちなのです。ああ、クリスチャンの忍耐とは何でしょう？ああ、心の度量とは何でしょう？神の子供たちは霊的光を熱心に求めるあまり、聖書解釈が自分たちと異なる人々に対して外部者のラベルを貼り、そのように彼らを扱うのです。神は私たちが異なる見解をもつ人々に対する愛の中で生きることを願われるのです。教師にとって、自分に対する批判こそが、真の霊的なテストとなるのです。

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月23日

*私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。-2
コリント4:7*

ここに实际的クリスチャン信仰の、おそらく最も明確な定義が示されています。クリスチャン信仰とは、地上の器でもなく、宝物でもありません。それは土の器の中にある宝です。人間的な弱さが神の力を制限することがないことのゆえに、私たちは大いに神に感謝するのです。

私たちは、容易に、土の器には力が欠如していると考ええるものです。しかるに、祝された主ご自身が「弱さのゆえに十字架につけられた」のです。弱さを覚えることはなんら悪いことではありません。私たちは自分の感情を氷のように凍結させる必要などはないのです。しかし、感情を発散する人々は、しばしば、周りの人々を捌け口として感情をぶつけますが、それでも彼らは人間関係を良好に保つために、その生まれながらの嗜好による感情の問題を何とか取り繕おうとするのです。これは違います。私たちはむしろ、私たちの感情を御霊に委ね、そのご目的のために用いていただくべきなのです。もちろん、主が命じられるのです。もちろん、私たちは神聖な宝を持っていますーそうです、しかし、それは冷蔵庫の中にはありません！

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月24日

これだけで、どうして百人もの人に分けられましょう。-2列王記4:43

神への奉仕において信仰は最も重要な要因であり、それなくしては真の靈的働きはなし得ません。しかし私たちの信仰は訓練と強化を必要とします。神はその目的のために物質的な必要を用いられるのです。漠然とした曖昧な事柄に関して信仰を告白することはそれほど困難ではありません。このことに関しては自分自身を欺むくこともあり得るのです。それは実際的な私たちの信仰がどのように欠如しているのかを明らかにすることができないからです。しかし、いったん経済的問題、飲食物やお金の問題になりますと、事はきわめて具体的になり、私たちの信仰の実際が試されるのです。もし私たちがそのような働きのための必要を神が答えてくださることに信頼していないのであれば、どうして靈的な必要を語ることに益があることでしょうか？私たちは人々に神は生きていますと宣べ伝えます。そして神が生きておられることを物質的領域の具体的取り扱いにおいて証明するのです。このように神への内なる確信が確立されていなければ、信仰が養われるために改めて靈的な必要が生じる時が必要なのです（訳注：それはより困難な訓練となることを示唆している）。

ウォッチマン・ニーによる靈想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月25日

そして…幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。-マタイ2:11

マタイ福音書は王の福音です。「私たちは礼拝するために来ました」と彼らは言い、そしてまず御子の正統な権利を確立しました。なぜなら礼拝こそがすべてだからです。礼拝すればするほど、神はそのことの根拠を私たちに見せて下さるでしょう。祈る前に、まず礼拝しましょう。宣べ伝えることにおいても礼拝しましょう。あらゆることにおいて主に心から礼拝を捧げるのです。これこそが今日地上における教会の仕事であります。すなわち神への礼拝を確立すること。私たちが礼拝することなくして、神はこの世において礼拝を受けることはできません。もちろん他の奉仕も忘れてはなりません、なお、まず礼拝を捧げるのです。賢者たちは自分の宝の箱を主に対して開きました。私たちは何も留保すべきではないのです。私たちが捧げるべきは香であり、香料ではありません。その香は、解き放たれる前に、香壇において完全に聖別される必要があります。これこそ真の礼拝です。今日、神は真の礼拝者たちを求めておられるのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月26日

しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。-ガラテヤ4:4

イエスが誕生された時、イスラエルは支配された国家でした。王国の偉大さは単なる記憶と化し、神の民はカエザルに貢ぎ物をしていたのです。時代はアウグストスの統治下にあり、ローマが世界を支配していました。しかし、そのような状況にも関わらずイエスは時が満ちたゆえに生まれました。すべては準備されていました。キリストの福音はすべての人のためであり、単にひとつの小さな国のためだけではありません。そこで神は世界をローマの下に置かれたのであり、イエス・キリストはローマの中でローマの十字架刑により処刑されたのです。

ローマの情報伝達網は優れていました。その道路と航路はあらゆる地域に通じていました。ユダヤ人はペンテコステの日にエルサレムに上り、福音を聴き、それを敵国の境界を通過することなく、自分の町に届けました。ローマが支配していたゆえに、使徒達は、人々に救い主を宣べ伝えながら、帝国の中を街から街へと自由に移動できました。使徒行伝には世的な権力の中立性と公正性が記録されています。聖書の中ではローマは獣と関連付けられています。しかしライオンの口を塞ぐ神はローマをご自分の道具として飼いならされていたのです。神が口を塞げば、人は誰も開くことはできません。神が口を開かせるならば、人は誰も閉じることはできないのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月27日

その御座の回りには、緑玉のように見える虹があった。-黙示録4:3

黙示録4章から11章における幻はすべて神の御座(4:2)と関係しています。また12章から22章までは神の宮(11:19)と関係しています。前者の開始のセクションでは御座の周りに虹が見えます。後者のセクションでは神の宮の契約の箱が見えます。神の御座は全宇宙の統治のために設立されています。その御座をとりまく虹は、あらゆる事象が神の配剤の下に置かれていること、そして御座におられる方は人類との契約に対して永遠に真実な方であることを全宇宙に証しするものです。神の宮は神の住まいのために設立されています。その臨在の中に契約の箱がありますが、それは不従順なイスラエルがその国家活動の中心として失って以来、神のご自身の証として存在します。それにもかかわらず、契約の箱は、ご自身の民のために、そのご本性に従って、ご自身の契約を確かに成就されると神ご自身が誓われることを保証しているのです。神はご自身を否定することはできません。キリストにあって神の真実は確認されました。そして私たちはそのお方のうちに置かれているのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月28日

この子のために、私は祈ったのです。主は私がお願いしたとおり、私の願いをかなえてくださいました。それで私もまた、この子を主にお渡しいたします。-1サムエル1:27

このふたつのフレーズに気がつきましたか？私にとってそれらはきわめて尊いものです。一緒にお読みしましょう：「主はかなえてくださいました・・・それで私も主にお渡しいたします」。彼女は嘆き悲しみつつ息子を主に祈り求めました。そして彼女の願いはよしとされたのです。祈りに対する答えで、これ以上のものがありますか？彼女の求めのすべてはこの子でした。しかし、今、その願いの中心であった子を得ると、彼女はその子を与えてくださったお方にお返しするのです。彼女の手からサムエルが捧げられると、このように書いてあります：「こうして彼らはそこで主を礼拝した」。

私にも、ハンナに訪れたように、その日が訪れるでしょう。私のサムエル、私のすべての希望が凝縮している存在、それが私の手から神の御手に渡される日です。その時私は、礼拝とは何か、その真の意味を知るのです。すなわち礼拝とは十字架を経過した後続くものであり、そこでは神のみがすべてのすべてとなるのです。私たちが大切にしていたものがすべて私の手からこぼれ落ち、私たちの焦点が自分自身から神へと移る時、それこそが礼拝なのです。

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月29日

岩の裂け目、がけの隠れ場にいる私の鳩よ。私に、顔を見せておくれ。あなたの声を聞かせておくれ。あなたの声は愛らしく、あなたの顔は美しい。-雅歌2:14

なんとしばしば私たちは主の臨在に入ることが困難な時があることでしょう！私たちは孤独に引きこもり、自分を外的な事柄から意図的に分離させますが、なお、私たちの思いはそれらの事柄を思いつつ迷っているのです。私たちの多くは人々と共に働くことに喜びを感じますが、何人の人たちが至聖所に退くことでしょうか？主の臨在に來りて、御前で膝をかがめて1時間を過ごすためには、自分のもつすべての力を必要とするのです。私たちはそれをなすためには強制的であるべきなのです。しかし主に仕える人はみなそのような時間の尊さを知っています。それは夜中に起きて主とともに過ごす1時間や、朝早く起きて祈りに1時間を捧げる時の甘さです。どうか率直に言わせてください。あなたは神から離れて奉仕することはできません。主の身元に近づくことを学ぶことを通してのみ、真に神に仕えることの意味を知るのであるのです。

ウォッチマン・ニーによる靈想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月30日

私は・・・大いに喜んで財を費やし、また私自身をさえ使い尽くしましょう。-2コリント
12:15

1929年、福音のための長期にわたる労苦の末、私は疲れ果てて福建省の故郷の町に戻りました。ある日、弱り果てた健康も害した姿で杖をつきながら通りを歩いていると、かつての大学のある教授に出会いました。彼は私を喫茶店に連れて入り、私たちは共に座りました。彼は私のことを見回して、こう言ったのです、「今、ここでこうして見ているが、われわれは君が大学にいた時には、君を大いに買っていたのだよ。われわれは君が何か偉大な事を成し遂げるであろうと期待していたのだ。ところが今の君はいったいどうしたことだろうか？」と。この急所を突いた質問を聞いた時、私は胸が張り裂け、泣き伏したい気持ちに襲われたことを告白しなくてはなりません。私は確かに自分の実績や健康など、すべてを失っていたのです。その状況でかつての教授はさらに質問を続けました、「君はこのままの状態ですっとあり続けるつもりかね？成功も、進歩も、見るべき何もものもないままで？」と。しかし、まさに次の瞬間、栄光の御霊が私の上に留まることを私は実際的に知ったのです。主のために自分自身の全てを注ぎ出すことができるという思いが、文字通り私の魂に栄光と共に流れ込んできたのです。私は顔を上げて、静かにこう言うことができました、「主よ、私はあなたを賛美します！これこそが私になし得るすべてのことです。これこそが私が選択した正しい道です！」と。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（12月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

12月31日

ダビデは、その生きていた時代において神のみこころに仕えて後、死んで先祖の仲間に加えられ、ついに朽ち果てました。-使徒13:36

ダビデは一代だけ仕えました。それは自分自身の時代です。決して二つの世代に仕えることはできなかったのです！今日、私たちは自分自身の仕事を、機関や、共同体や、組織を構成して永続させようとしています。しかし、旧約の聖徒たちは自分の時代においてのみ仕え、去っていったのです。これはひとつの重要ないのちの原則です。小麦は撒かれ、成長し、実を結び、成熟し、そしてすべての部分が根に至るまで刈り取られるのです。神のみわざは地的な根を一切持たないほどに霊的なものであり、地とそこにあるものの臭いすら感じさせないのです。人は過ぎ去ります。しかし、主は永遠です。教会がなすべきことは常に今日的であり、今この時に活動し、集まるのです。過ぎ去った時間の必要のためではありません。またそれを地上に静止したまま止めおくこともできません。神ご自身がご自分の働き人を取り除けられ、また他の者を備えるのです。私たちのわざは廃れますが、神のわざは決して廃れません。何者も主に触れることはできません。主は厳然として神であられるのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想